

発掘調査の概要

藤原京左京八条三坊の調査（飛鳥藤原第202次）

前号では、発掘調査前半の状況を中世の遺構を中心に報告しました。その後、2020年3月30日まで調査をおこない、新たな知見を得ました。

調査区中央では、南東から北西に流れる自然流路を検出しました。第27-7次調査で確認した大溝の続きとみられます。当初、1本の流路と考えていましたが、調査を進めるうちに2本の流路が重複することがわかってきました。古い流路は弥生時代後期の土器を埋土に含み、幅6m以上、深さ0.4mありました。いっぽう新しい流路は、幅3.0m、深さ0.6mあります。この流路を藤原京期に埋め立てたのち、その周囲は大規模な整地をおこなっています。

ほかにも古代の遺構として、調査区南部で柱穴列2条を検出しました。柱穴列は建物や塀の一部を構成する可能性があります。しかし、柱穴列の南や東は平安時代以降の洪水により大きく削平されており、柱穴の続きは検出できませんでした。

また、弥生時代の遺構として、自然流路のほかに井戸や土坑、溝を検出しました。特に井戸は素掘りで、径1.1m、深さ0.8mあります。井戸の埋土最下層、中層、最上層からは弥生時代後期の完形の長頸壺が1点ずつ出土しました。これらは井戸を埋める際に意図的に置かれた可能性があります。

このように、本調査では弥生時代から中世までの遺構を確認しました。古代以前に調査区内を流れていた自然流路の存在は、現在は調査区より約10m南で北西から西へと向きを変える中の川の旧河道を考える上で参考になります。流路は藤原京期以降埋め立てられ、その後何度か洪水を経験しつつも、この地が中世まで活発に利用されていた状況があきらかになりました。（都城発掘調査部 石田 由紀子）



調査区全景（南東から）